

そよかぜ診療所での研修を終えて

神戸大学医学部附属病院 初期研修医 酒井菜々花

初日からいきなり大雨、梅雨真ただ中の7月に、そよかぜ診療所での研修が始まりました。診療所の最寄りである梁瀬駅は無人駅で、ICOCAで乗車した私はいきなり焦ることになり、また、1か月分の大きいトランクを持って階段を登れず、事務の方に運んでいただくというご迷惑もおかけしてしまいました。そんな風に研修がスタートしましたが、診療所の岡本秀樹先生、静子先生、黒瀬先生をはじめ各スタッフさん方が温かく受け入れてくださり、とても思い出に残る1か月となりました。朝来市は今まで訪れたことがなかったのですが、四方を山に囲まれ、種々の動物・昆虫との共存、綺麗な水とおいしいお米、そして日本酒…。2024年住みたい田舎ベストランキングで総合5位（田舎暮らしの本/宝島社出版）であることが大きくうなずける素敵な場所です。1日研修させていただいたほかに診療所でも、休憩時間に竹田城のふもとを散策させていただきました（おいしいランチも!）。また雲海シーズンが来たら、ぜひとも日本のマチュピチュを見に行きたいと思います。

そよかぜ診療所では、午前は主に外来での採血、頸部・心エコーをさせていただきました。先生や看護師さんに教えていただきながら日々成長していくのを実感でき、またそれぞれの患者さんとたわいもない話をする時間はとても充実したものでした。午後は毎日訪問診療があります。最初の2週は静子先生と共に、後の2週は看護師や事務の方と共に訪問しました。それぞれの患者さんの気持ちを汲みつつ、必要な時には助言と適切な治療を行う。訪問診療ならではの信頼関係で地域医療を支えるそよかぜ診療所のような場所が地域には必要で、住民にとっても欠かせない存在であることを実感しました。将来自分がどこで働くのか自分でも想像できませんが、そよかぜ診療所のように地域住民を支える医師としての将来像をイメージすることができました。

他にも、先生方には医学のことだけではなく、10年20年後の将来も見据えていくことを教わりました。日本の現在の医療状況、高齢者数、要介護率の推移などの情報を随時把握して、大学病院や総合病院などで限られた患者さんを診ているだけでは得られない情報にも常にアンテナを張る必要性を学びました。

1か月とは思えない濃い研修をさせていただきました。改めて、先生方、スタッフの皆様方、地域住民の方々に感謝いたします。ありがとうございました。